

鯨人の感謝

昔、近江の國に俵屋藤太郎と云ふ人があつた。家は名高い石山寺に遠くない、琵琶湖の岸にあつた。彼には相應の財産もあつて、安樂に暮らしてゐたが、二十九歳にもなつて未だ獨身であつた。彼の大野心は絶世の美人を娶る事であつたから、氣に入る少女を見出す事ができなかつた。或日、瀬多の長橋を通ると、欄干に近く蹲つて居る妙な物を見た。その物は體は人間のやうだが、墨のやうに黒く、顔は鬼のやうであつた。眼は碧玉の如く緑で、鬚は龍の鬚のやうであつた。藤太郎は初めは餘程驚いた。しかし彼を見るその緑の眼は餘程やさしかつたので、彼は少しためらつたあとで、その動物に問を發して見た。そこで、それが彼に答へて云つた、『私は鯨人です。ついこの間まで、八大龍王に仕へて龍宮の小役人を務めてゐましたが、私の犯した小さい過ちのために、龍宮から放逐され、それから又海からも追放される事になりました。それ以來私はこの邊に、——食物を得る事も、臥すべき場所さへもなく、——漂泊して居ります。どうか哀れと思召して、住居を見出せるやうに助けて下さい、それから何か喰べる物を頂かして下さい、御願です』

この懇願は如何にも悲しい調子と、如何にも卑下した様子で云はれたので、藤太郎の心は動い

た。『一緒に来い』彼は云つた。『庭に大きい深い池があるから、そこに好きな程いつまでもゐたらよい、食物は澤山あげる』

鮫人は藤太郎について、その家に行つて、池が餘程氣に入つたらしかつた。

それから、殆んど半年程、この奇妙な客は池に棲んで、藤太郎から海の動物の好きさうな食物を毎日貰つてゐた。

謝 感 の 人 鮫

ところでその年の七月に、近くの大津の町の三井寺と云ふ大きな寺に女人詣があつた、藤太郎はその佛事を見物に大津に出かけた。そこに集まつた大勢の女や娘のうち、彼は非常に美しい人を見つけた。十七歳ばかりに見えた、顔は雪のやうに白くて清かつた。口のやさしさは見る者をして、その聲は『梅の木に囀る鶯のやうに美し』からうと思はせた。藤太郎は見ると共に戀に陥つた。彼女が寺を離れた時、彼は適當な距離で彼女のあとをつけて行つて見ると、彼女は母と共に、近所の瀬田村の或家に數日の間逗留して居る事を發見した。村人の或者に問うて、彼は彼女の名が珠名である事、獨身である事、それから彼女の家族は彼女が普通の人と結婚する事を喜ばない事、——そのわけは一萬の珠玉を入れた箱を結納として要求してゐたから、——を知ることができた。

この事を聞いて藤太郎は大層落膽して家に歸つた。娘の兩親が要求する妙な結納の事を考へれ

ば考へる程、彼は彼女を妻にする事は決して望まれないやうに感じた。たとへ全國中に一萬の珠玉があるとしても、大きな大名でもなければそれを集める事は望まれなかつた。

しかしただ一時間も藤太郎は、その美しい人の面影を彼の心から忘れる事ができなかつた。喰べる事も眠る事もできない程、その面影が彼を惱ました、日が立つに随つて益々はつきりするやうであつた。そしてたうとう彼は病氣になつた、——枕から頭が上らない程の病氣になつた、それから彼は醫者を迎へた。

丁寧に診察してから、醫師は驚きの叫びをあげた。『どんな病氣でもそれぞれ適當な處方はあるが、戀の病だけは別です。あなたの病氣はたしかに戀煩ひです。直しやうはない。昔、瑯琊王伯與はこの病で死んだが、あなたもその人のやうに、死ぬ用意をせねばならない』さう云つて醫者は、藤太郎に何の薬も與へないで、去つた。

この時、庭の池に棲んでゐた鮫人は主人の病氣を聞いて、藤太郎の看護をしに、家に入つて來た。そして彼は夜となく晝となくこの上もない愛情をもつて看護した。しかし彼はその病氣の原因も重大な事も知らなかつたが、一週間ばかりして、藤太郎は自分の命數ももうつきたと思つて、こんな永訣の言葉を發した、——

『こんなに長くお前の世話をする事になつたのも、前世からの不思議の縁であらう。しかし私の病氣は今餘程悪い、そして毎日悪くなるばかり、私の生命は夕を待たぬ間に消ゆる朝の露のやう

だ。それでお前のために、私は心配して居る。これまでお前を養つて来たが、私が死んだあと誰も世話して養つてくれる者はなからう。……氣の毒だ。……あゝ、この世ではいつでも思ふ事がままにならぬ』

藤太郎がかう云ふや否や、鮫人は妙な苦しみみの叫びを發して烈しく泣き出した。そして泣き出すと共に、大きな血の涙が緑の眼から流れて出て、彼の黒い頬を傳うて床の上に落ちた。落ちる時は血であつたが、落ちてからは固く輝いて綺麗になつた、——貴い價の珠玉、眞赤な火のやうなすばらしい紅玉ルビーになつた。即ち海の人が泣く時には、その涙は寶石になるのであつた。

その時、藤太郎はこの不思議を見て、元氣が回復したやうに、驚きかつ喜んだ。彼は床から跳び起きて、鮫人の涙を拾つて數へ始めた、同時に『病氣は直つた。もう死なぬ、死なぬ』と叫びながら。

そこで鮫人は非常に驚いて、泣くを止めて藤太郎にこの不思議に直つた理由を説明して貰ふやうに願つた、そこで藤太郎は三井寺で見た若い女の事、その女の家族によつて要求された異常な結納の事を話した。藤太郎は加へた、『一萬の珠玉は決して得られないと信じたから、私の望みは到底達せられないと思つた。しかし今、お前が泣いてくれたので、私は澤山の寶石を得る事ができた、それで私はあの女を娶る事ができると思ふ。ただ——未だ寶石が足りない、それで頼むからもう少し泣いて貰ひたい、必要な數だけにしたから』

しかしこの要求に對して鮫人は頭を振つて、驚きと非難の調子で答へた、——

『私は賣女のやうに、——何時でも好きな時に泣く事ができるとお考になるのですか。いや、違ひます。賣女は人をだますために涙を流します、しかし海の者は本當の悲しみを感じないで泣く事はできません。あなたが亡くなられると思つて、心に本當の悲しみを感じたので泣きました。しかし病が直つたと云はれたので、もう泣く事ができません』

『それぢやどうしたらいいだらう』藤太郎は悲しさに問うた。『一萬の珠玉がなければ、あの女を娶る事はできない』

鮫人は暫らく黙つて考へてゐた。それから云つた、——
『聞いて下さい。今日はどうしても、もう泣けません。しかし明日一緒に酒と肴をもつて瀬田の長橋に参りませう。暫らく一緒に橋の上に休んで、酒を飲みながら、はるかに龍宮の方を望んで、そこで楽しい月日を送つた事を考へて、故郷を慕ふ心が出て来れば——私は泣けます』

藤太郎は喜んで承諾した。

翌朝二人は酒肴を澤山携へて、瀬田の橋に行つた、そしてそこに休んで宴を開いた。酒を澤山飲んでから、鮫人は龍宮の方を眺めて、過去の事を想ひ出した。そして次第に心を弱くする酒の力で、過ぎ去つた楽しい日の記憶が彼の胸に一杯になつた、そして彼は盛んに泣く事ができた。そして彼の流した大きな赤い涙は、紅玉ベニタマの雨となつて橋の上に落ちた。そして藤太郎は落ちるに随つてそれを拾つて箱の中に入れた、そして數へて見たら、正に一萬の數に達した。その時彼は喜びの叫びを發した。

殆んど同時に、はるか湖上から、楽しい音楽が聞えた、そして沖の方に、湖上から、何か雲の形のやうな、落日の色の宮殿が浮んだ。

直ちに鮫人は橋の欄干の上に跳び上つて、眺めて、喜んで笑つた。それから藤太郎の方に向つて、云つた、――

『龍宮國に大赦があつたに相違ありません、王様達は私を呼んでゐます。それで今お別れをいたします。御高恩に報ゆる事が少しでしたので嬉しく思ひます』

かう云つて彼は橋から跳び下りた、そして再び彼を見た人はなかつた。しかし藤太郎は珠名の兩親に紅玉の箱を贈つて彼女を娶つた。

(田部隆次譯)

The Gratitude of the Saméto. (Shadowings.)